

「キリストの轡」

惰性で生きるのはもう嫌だ、どうでもいいような日々ではなく、生きたと言えるほどに生きたい。そのような思いが与えられたのが、キリスト信仰の第一歩だった。

生きたと言えるほどに生きたい、ほとんどその一つのことを願いながらも、どこか徹底しない、何かしら空虚なものが時として漂うのはなぜか、分からずにいた。

今年初め、「喜びの日も涙の夜も・鈴木正久聖想 366」に出会って、「お前の求める、生きたと言えるほどに生きるとはこういうことだ」と目を覚まされた。

それは、神の言葉に向き合って真実であるために、苦しむことを拒まないことだった。

今日与えられた負うべき荷を誠実に負い、「主の勝利にわたしもあずかる」という不滅の希望をもって今日を生きることだった。

人が何らかの信仰を持つのは、苦しみを逃れるためだと思われやすい。だから、苦しい人は信仰を持ったらいけれど、この私には必要ないという人も多い。苦しみから救ってくださるのが救い主であり、苦しまなくていいように守

ってくださるのが神様だとあたりまえのように思っている。だから、キリスト教と言いながら、心の底では家内安全、無病息災を願っていたりする。人間なもの、それも仕方がないかというあいまいな思いが、次の一文で吹っ飛んでしまった。

.....

「苦しみにあいたりしはわれによきことなり、これによりてわれなんじの律法をまなびえたり」詩編 19:71

かつて私は苦しみを憎み、苦しみのない状態を切望した。だが苦しみのない日は一日もなかった。その後、苦しみのない日が2, 3日あった。この日、私は幸福だったろうか。いや、私の心の苦しみのない日には思いがけないほど馬鹿げた、下らない、とるに足りないことに向かって転落していった。苦しみのある日には・・・自分が罪を犯す苦しみを通してさえも・・・私の心は必死で、真剣で、その限りにおいて高められていた。かくて今や私は苦しみを是認する。地上の今後の生活で、全く苦しみが無い生活を求めるか、苦しみを受ける生活を求めるかと今問われたら、私ははっきりと苦しみのある生活を求める。これは被虐待趣味からではない。馬鹿げた、下らない、とるに足りないことに心が転落する生活を嫌悪するからだ。苦しみの堪えるのみでなく、感謝すべきものだ。苦し

みについての泣きごとをお互いにやめよう。(聖想1月5日)

.....

この本に出会う少し前、私もこの世でいえばもう退職する年だから、今与えられている小さな集会なども、少しずつ控えるようにしなければと思ったりした。私など何をしても大したことはできないのだから、身の程というのを知って、静かに暮らしていればいい。

だが、そのように自分の無力にこだわり、どんどん気落ちしていくことこそ、キリストよりも自分を重んじる不信仰そのものなのだと、悟らされた。

.....

「主なるわたしは変わることはない。それゆえ、ヤコブの子らよ、あなたがたは滅ぼされない」マラキ書 3:6

私たちが十字架を負わなくてもよいようになるというのではない。むしろ負うべき十字架は日々にあるだろう。それ故に、私たちは苦しみもするだろう。だが、それらは私たちが滅ぼさない。それらは最後の栄光に向かっている。主なる神は、その私たちに対する愛と真実において、変わることはない。自己への人生の失望はこの主から目をそらし、自分自身の悲観的な見通しに心の思い

が転落することからしか生じ得ない。主をあがめることは、自己の生活への希望をもつことである。(聖想1月3日)

.....

どんなに貧しい歩みであっても、どんなに無益な労苦であっても、そんなことで責められたり滅ぼされたりはしない。たとえ一人になっても、主なる神をしっかりと見つめている限り私たちは「最後の栄光に向かっている」。

☆ふと本棚の「コルチャック先生・子どもの権利条約の父」という絵本が目にと留まった。何気なく開いて、次の一文に心打たれた。

「私の人生は困難なことの多いものでしたが、でも、こころをわきたたせるようなことがたくさんありました。それはまさに、私が若かったころ、神様に求めたとおりの人生でした。私はこう祈っていたのです。どうか試練に満ちた人生をお与えください。しかし、人生を美しく、こころ豊かで、品格のあるものにしてください、と」

ヤヌシュ・コルチャック『ゲット一日記』より

☆「悩みの日にはわたしを呼べ、わたしはあなたを助け

あなたはわたしをあがめるであろう。」詩篇 50:15

人間にはそれぞれ都合がある。たとえ携帯がかけ放題でも、自分の都合でいつでも電話するわけにはいかない。まず、相手の都合を考える。

そう思った時、ふと気づいた。私が思わず「主よ」と呼ぶとき、「今は都合が悪い」などと言われたことは一度もなく(感じたことがなく)、「待っていたよ」と言わんばかりに迎え入れてくださる。道を歩きながら話しかけても、間違った自己憐憫で愚かなことを口にしても、「そんな話は聞きたくない」とうっとうしがられたこともない。私たちは、何という善き友を与えられていることかと胸が熱くなる。

でもここでは特に、「悩みの日にわたしを呼べ」と言われる。誰が見ても、もう取り返しのつかない絶望的なできごと、過失であっても、故意にであっても、人の命にかかわることは何をもってしても償うことはできない。でも、そのような人の力の及ばない悩みの日こそ「わたしを呼べ」「叫べ」と命じられ、「わたしはあなたを助ける」と約束されている。わたしに向かって叫ぶなら、わたしはあなたの救い主となり、「あなたはわたしをあがめるであろう」と。

聖書の言葉を信じるのは勇気がいるが、信じなければ何も始まらない。